

クラヴィーア・ソナタ《トルコ行進曲付き》K.331の自筆譜発見

野口秀夫

1. はじめに

犬輔：昨年2014年9月の新聞記事によればハンガリーの図書館で5年以上前に発見されていたクラヴィーア・ソナタ《トルコ行進曲付き》K.331の手書き楽譜がモーツァルトの自筆であると確認されたというニュースがあった^{注1}。その時点ではセンセーショナルな報道だったけど、1年経った今、落ち着いて研究成果をまとめておきたいね。

鳥代：そうね。今年2015年の8月にはファクシミリ^{注2}がインターネットで公開されたし、6月には新版の楽譜^{注3}が出版されたようだからね。

犬輔：でも、これほど親しまれている《トルコ行進曲付き》ソナタの自筆譜が残っていなかったなんてぼくには意外でした。本当にそれまで何も残っていなかったんですか。

教授：いや、最終ページの一葉だけは従来から存在が知られていた。だがその所有者が目まぐるしく変わり、追跡に苦勞を要するほどなのはこの曲の自筆譜の辿った運命を象徴しているかの如くだ。かつてはオフエンバッハ・アム・マインのアン Dre 出版の所有だったその一葉は1929年にレオ・リープマンズゾーンの競売に掛けられ、1930年から1953年までニューヨークの古物商パウル・ゴットシャルクの下にあった。そして1953年にチャールズ・ハミルトンを経て1954年にはリスボンのアントニオ・デ・アルメイダの所有となり、そのファクシミリが新モーツァルト全集に掲載された。さらに1986年にフリードリヒ・ゲオルク・ツァイルアイスのコレクションになった後、1992年にやっと国際モツァルテウム財団のモーツァルト図書館所蔵となったのだ^{注4}。

鳥代：その一葉には第3楽章最後の38小節が書かれており、裏が空白になっているということは旧聞に属する情報ね。

犬輔：オフエンバッハのアン Dre 出版と言えば、コンスタンツェが大量の自筆譜を売却した相手ですよ。その時にはこの曲の全曲が揃っていたのではないのでしょうか。

教授：いや、1799/1800年にモーツァルトの遺品を購入した時点ですでに最後の一葉しかなかったとアン Dre が手書きカタログに注記しているんだ^{注5}。

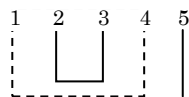
鳥代：それもあって研究者の誰もが他のページはもう現れることはないだろうと諦めていたのね。

2. 発見の経緯

犬輔：これは突然のニュースでした。ブダペストのハンガリー国立セーチェーニ Széchényi 図書館音楽コレクション部門長のバラージュ・ミクシ Balázs Mikusi 氏（ミクシが姓）が退職した前任者から引き継いだ数百もの筆写譜を整理していたところ、作曲家自身の手によると思しき楽譜に目が止まり、それがモーツァルトの《トルコ行進曲付き》ソナタの自筆譜ではないかと気が付いたと、新聞では紹介されています。

鳥代：すぐにモツァルテウムに照会し、調査研究部門ディレクターのウルリヒ・ライジンガーから自筆譜に間違いはないとお墨付きをもらったというのね。

教授：なぜブダペストに保管されていたのか、その経緯については全く手掛かりがない。それに、今回自筆譜の全体が揃ったわけではない。発見されたのは1枚の複葉であり、まだ未発見のフォルオが残るんだ。フォルオ構成は下図だと推測され、今回発見されたのは Folia 2, 3 であって、Folio 5 がモツァルテウム蔵の一葉だ。破線の Folia 1, 4 は未発見である。



犬輔：それぞれのページの内容については以下の通りですね。

- 1r, 1v：第1楽章 主題第1小節～第2変奏最終小節
- 2r：第3変奏第1小節～第4変奏第14小節（今回発見）
- 2v：第4変奏第15小節～第5変奏第16小節（今回発見）
- 3r：第5変奏第17小節～第1楽章最終小節（今回発見）
- 3v：第2楽章メヌエット全体およびトリオの第10小節まで（今回発見）
- 4r, 4v：トリオの第11小節～第3楽章第89小節まで
- 5r：第3楽章第90小節～第3楽章最終小節
- 5v：空白

鳥代：残りの Folia 1, 4 が発見される可能性はあるのでしょうか。わたしが思うに、冒頭の部分ですから作曲者の名前が書かれており、無名の作曲家と取り違えられてどこかに紛れ込んでしまっているとは考えにくいので、本当に無くなってしまっている可能性が高いですね。

犬輔：自筆譜が五線紙の構成単位で3分割されてそれぞれが異なる経路に伝搬していったという事は、有名な曲となった時点で持ち主が知り合い2人に複製を順にプレゼントしたとは考えられないでしょうか。最終葉だけはプレゼントする相手が現れなかった。

鳥代：モーツァルト本人はそんなことをしないだろうし、もしそうならコンスタンツェしか考えられないわね。最終葉はコンスタンツェからアンドレに渡したのですから。

教授：コンスタンツェがわざわざ商品価値を低めることをするはずがないから何らかのアクシデントがあったと考えるのが妥当ではないかね。

3. 発見の意義

教授：2014年10月5日の国際モーツァルト会議 Internationaler Mozart-Kongress では発見者のミクシ氏による Possible, Probable, or Certain Errors in the First Edition? Evaluating a Newly Found Autograph Fragment of the Sonata in A major, K. 331 と題する発表があった^{注6}。

鳥代：その持って回ったようなタイトルはどう訳すのですか。

犬輔：「初版においては間違いかも知れない、多分間違いであろう、あるいは確実に間違いである？ 新発見のソナタイ長調 K.331 の自筆断片の評価」と訳せます。

鳥代：言葉だけでなく確率で言ってもらわないと分からないわ。

犬輔：ある文献によれば英語の常識での確率は possible が 25%、probable が 65%、certain が 95%だそう。ついでに likely が 60%と言われている^{注7}。

鳥代：自筆譜が出てきたのに初版の間違いを完全には訂正できないというのはどういうことなのでしょう。

教授：それが今回の発見の意義なんだ。ミクシ氏のインタビュー記事^{注8}を注意して読んでご覧。

鳥代：はい、訳してみましょ。「メヌエットにおいてはいくつかの楽句が数多くの議論を呼んできた。そして多くの人々が『モーツァルトの自筆譜にはそう書かれていなかったかも知れない』と言って初版の修正に手を付け始めていた。しかし今や自筆譜が手元にあり、初版をまな板の上に乗せる。そこで私が思うのはモーツァルト学者たちが信じるモーツァルトが書いたであろうことが何々であり、同じく書かなかったであろうことが何々であるかを再考していくべきだということである。じっさいいくつかの差違があるが、多分モーツァルトは初版を承認しており、それゆえ自筆譜が初版を上書きするケースばかりとは限らないということをお我々は思い起こすべきである。その点で、ある場合はそれがミスプリントであるだろうし、ある場合はモーツァルトが修正を施したものであろう。つまりこの自筆譜がバイブルでこれに従わなくてはいけないということではない。このことはすべての状況をより複雑にする。だが、この自筆譜は今後我々が考察しなければいけない最も重要な源泉資料の一つとなるのである」。

犬輔：今までモーツァルトの新発見に関する発表をいくつか経験しているけど、その中で今回の発表は主張がはっきりしていて気持ちいいですね。

教授：もう少し分かりやすく確認方法を定型化しておこう。すなわち、自筆譜と初版の間にもう一つモーツァルトが関わった筆写譜があるという仮定を置くことだ。それは自筆譜には強弱記号がほとんど欠けている一方、初版には真っ当に強弱記号が付けられており、それらがモーツァルトの指示に由来していないとは考えにくいからだ。そのモーツァルトの意図が盛り込まれた筆写譜がアルタリアに渡され、出版後に失われたと思われる。後述の通り自筆譜も既に渡されていたと考えられ、こちらはすぐにモーツァルトに返されたのだろう。

4. 従来版と自筆譜の相違点

教授：それでは、国際モーツァルト会議におけるミクシ氏の発表を聴取されたベルリン在住の畑野小百合氏の報告^{注9}に基づいて以下話を進めていこう。

犬輔：国際会議の1週間前にはブダペストでプレゼンテーションが行われ、ゾルタン・コチシュによる全曲演奏^{注10}もなされ、新聞記事となったわけだけど、国際会議そのものの正式報告はモーツァルト年鑑 (MJB) でなされることになるんだね。会議では英語で30分の口頭発表だからほんの要旨が述べられただけなんだ。

鳥代：初版は1784年にヴィーンのアルタリア社から出版されているのね。でもアルタリア版のテキストには疑問が唱えられる箇所も多く、後の校訂者によって相違するエディションが多く生み出される原因となったと言われているの。

教授：モーツァルト作品にみられる音楽語法や同時代の様式に関する研究、音楽理論の見地からの推測、初期の他の出版譜や筆写譜の参照などが校訂者を初版の“訂正”へと駆り立てたというわけだ。

4.1 第1楽章 第5変奏第5、6小節（第1楽章95、96小節）

教授：まずは自筆譜における第1楽章第5変奏第5、6小節を見てもらおう。音部記号と調号は貼り合わせだが、右手がハ音記号で記譜されていることに気付いてくれたね。

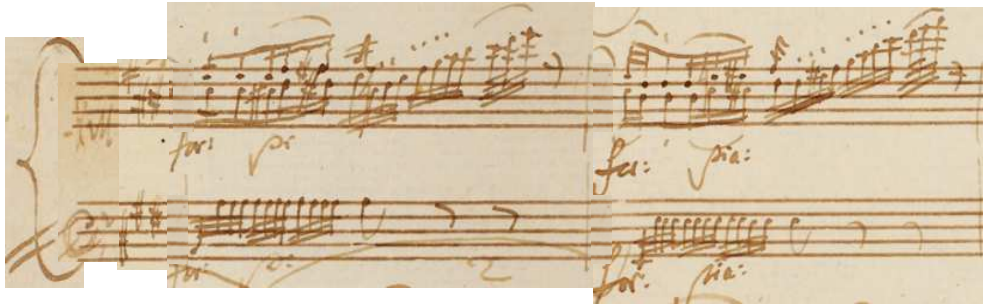


図1 自筆譜 第1楽章95、96小節

鳥代：それぞれの小節の右手6拍目は、2つの64分音符と1つの32分音符、そして1つの16分休符からなり、勢いよく駆け上がるような動きを示しているわね。

犬輔：あれっ。聞きなれた演奏はこれとは違って 있습니다よ。新全集¹¹を見てみましょう。

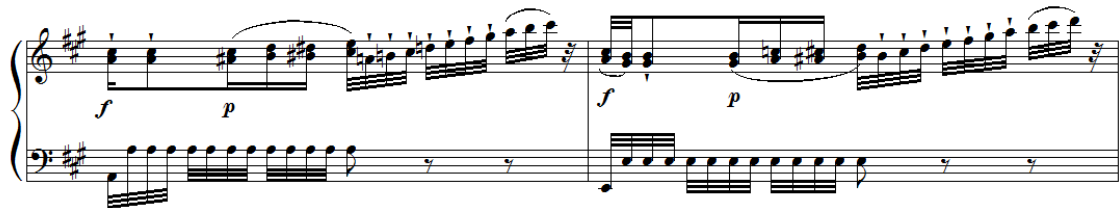


図2 新全集版 第1楽章95、96小節

鳥代：6拍目は3つの32分音符と1つの32分休符で構成される穏やかなヴァージョンになっているわ。何故なのでしょう。

教授：それはアルタリアの初版のミスプリントに原因があるんだ。こうなっている。



図3 アルタリア初版 第1楽章95、96小節

鳥代：2つの32分音符と1つの16分音符、そして1つの16分休符が並び、小節全体の拍数の整合性がとれていないわ。でもうっかりミスだけが原因ではなさそうね。自筆譜のあまりに切れが良すぎる64分音符を感覚的に受け付けられないため、目の前の64分音符が32分音符に見えてしまったのではないかしら。

犬輔：ぼくもコチシュの演奏を聴いて、装飾音を弾いたのかと一瞬勘違いしたほどだから初版では64分音符を意識的に避けた可能性もありますね。休符も変更しているほどですから。

教授：でも6拍目の拍があわないだけでなく、1拍目も8分音符に間違えているのはかなりずさんな校訂だ。

鳥代：アルタリアは間違いに気付かず訂正しないままだったのでしょうか。

教授：面白いものを見せよう。修正の跡がある楽譜¹²だ。



図4 アルタリア初版 第1楽章95、96小節 [フランス国立図書館蔵]

犬輔：1拍目を16分音符に修正していますね。でも購入者による修正ですよ。

教授：そうだね。では同じアルタリア初版だがこの修正はどうだ^{注13}。



図5 アルタリア初版 第1楽章 95, 96小節 [ハーヴァード大蔵]

鳥代：おや、これも購入者による修正ですが、6拍目もきれいに修正されていますね。ファクシミリで資料を研究する場合には気をつけないと書き込みだと気付かないで騙されてしまいそうです。でも誰が32分音符に修正するように助言したのでしょうか。

教授：アルタリアの初版には改訂版^{注14}があるんだ。解像度が悪いが勘弁願いたい。



図6 アルタリア改訂版 第1楽章 95, 96小節 [アウクスブルク州立図書館蔵]

犬輔：改訂版では新しく版を起こして修正されているんですね。

教授：アルタリアは間違いに気付いたものの、モーツァルトの自筆譜に戻って改訂する手立てがなくなっていたものと思われ、拍の辻褃合わせの修正をせざるを得なかったということだ。

犬輔：アルタリア版は1784年8月25日に初めてヴィーン新聞に広告が載ったんでしたね。それが初版だとすれば改訂版の発行は何時だったんでしょう？

教授：改訂版の発行にはミステリーが付き纏っている。そもそも表紙には改訂版であるという記載がない。2フローリン30クロツァーだった販売価格が改訂版は4フローリン30クロツァーになっていることだけが目印となるんだ。楽譜上は版刻者が違うからシャープの記号が✳から井に変わっているなど容易に区別がつく^{注15}。既に初版を購入していた人はクラヴィアの先生に改訂内容を教えてもらい手書きで修正を試みたんだろうね。

鳥代：これ以後の出版楽譜はすべてこの改訂版を基にしているのね。その例が旧全集版^{注16}だわ。



図7 旧全集版 第1楽章 95, 96小節

教授：ではモーツァルトの意図を想定してみよう。自筆譜のリズムを尊重し、若干の臨時記号を追加するのが妥当だろう（なお、以下想定はヘンレ新版とは必ずしも一致しない）。



図8 モーツァルトの意図（想定） 第1楽章 95, 96小節

4.2 第 1 楽章 第 5 変奏第 16 小節（第 1 楽章 106 小節）

鳥代：次は第 1 楽章第 5 変奏第 16 小節ですね。自筆譜はこうなっています。すなわち小節後半の上声部が複付点 8 分音符と 32 分音符になっています。ハフナー交響曲 ニ長調 K.385 の第 2 楽章冒頭を思い出しますね。鋭い複付点リズムを印象深く感じます。

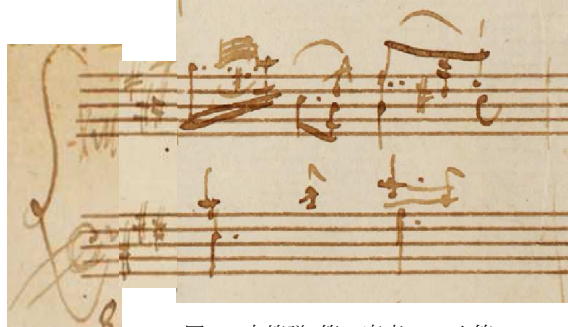


図 9 自筆譜 第 1 楽章 106 小節

犬輔：初版ではどうなっているでしょう。ああ、やはり平凡な付点 8 分音符と 16 分音符のリズムに変えられてしまっていますよ。ここは複付点をうっかり見過ごしたというより、当時の一般的リズム語法に則って修正されたという可能性が高いのではないのでしょうか。

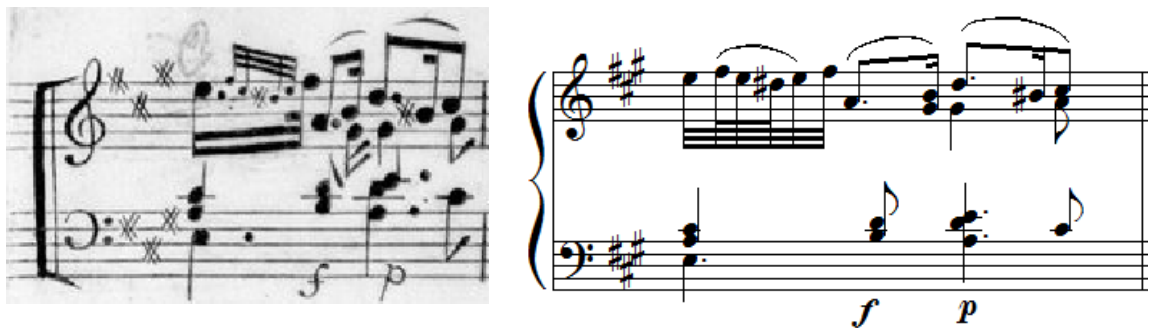


図 10 アルタリア初版 第 1 楽章 106 小節

教授：以後すべての版に平凡なリズムが採用されている。一旦そうってしまったら最後、自筆譜を見ない限り元が複付点であったと想像することは極めて難しくなる。したがってこの部分の自筆譜が発見された意義は大きい。

鳥代：ところで上声部最後の 3 音が「ニー嬰ロー嬰ハ」音となっていますが、現代譜では「ロー嬰ロー嬰ハ」音に変更されています。新全集譜を見てみましょう。



図 11 新全集版 第 1 楽章 106 小節

犬輔：これは何故変更されたのでしょうか。

鳥代：アルタリア版の「ニー嬰ロー嬰ハ」だと下図のように「ニー嬰ハ」が平行 8 度となるためこれを間違いであるとみなした校訂者が勝手に「ロー嬰ロー嬰ハ」音に訂正したのよ。

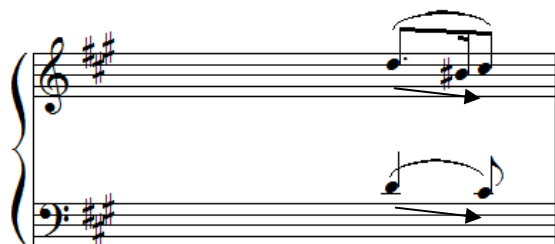


図 12 自筆譜 第 1 楽章 106 小節後半の平行 8 度

犬輔：「嬰ロ」音が間にあるから平行8度は薄められて問題にならないのではないかな。訂正してしまうなんてやりすぎだよ。

教授：犯人捜しをするつもりはないが、「ニー嬰ロー嬰ハ」音は自筆譜、アルタリア初版（1784年）、アルタリア改訂版（1784年）、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル モーツァルト全集版（1798年）^{注17}、同改訂版（1818年）^{注18}まで維持されていた。その後のブライトコプフ・ウント・ヘルテル 旧全集版（1878年）、シャーマー版（1893年）^{注19}、ペーターズ版（1938年）^{注20}、ベーレンライター新全集版（1986年）で「ニー嬰ロー嬰ハ」音になっているんだ。契機となったのは旧全集のようだね。

鳥代：自筆譜のように演奏すると曲が生き生きとするわ。

教授：それではモーツァルトの意図を想定しておこう。失われた筆写譜では自筆譜のまま修正はしていなかったものと思われる。



図13 モーツァルトの意図（想定）第1楽章 106小節

4.3 第2楽章 第3小節

犬輔：第2楽章メヌエットの第3小節と第33小節には初版にうっかりミスがあつて教訓が目白押しだけど、かといって修正したうえで聴いてみてもあまり際立った変化が感じられないのは拍子抜けしてしまいます。

鳥代：では詳しく説明してね。

犬輔：自筆譜の第1～4小節はこうなっています。また第31小節以下は7小節間ダ・カーポの演奏指示です。



図14 自筆譜 第2楽章 第1～4小節及び第31小節以下

鳥代：初版では第3小節の最高音が自筆譜と同じ「2点イ」音だけれど、第33小節ではそれが「3点嬰ハ」音になっているわ。これは何故かしら。



図15 アルタリア初版 第2楽章 第1～4小節及び第31～34小節

犬輔：ハ音記号からト音記号の変換のときに版刻者が音を取り違えたうっかりミスが33小節の間違いの原因だろうね。アルタリア初版（1784年）に続くアルタリア改訂版（1784年）、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル モーツァルト全集版（1798年）もそうなっている。

鳥代：でも、わたしたちが馴染んでいるのは第3小節、第33小節の両方とも「3点嬰ハ」音よ。以後の校訂者は間違いの上塗りをしてしまったということなのかしら。

犬輔：そう言っていただろうね。第3小節、第33小節の両方とも「3点嬰ハ」音なのはブライトコプフ・ウント・ヘルテル モーツァルト全集改訂版（1818年）、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル 旧全集版（1878年）、シャーマー版（1893年）、ペーターズ（1938年）、そしてベーレンライター新全集版（1986年）なんだ。

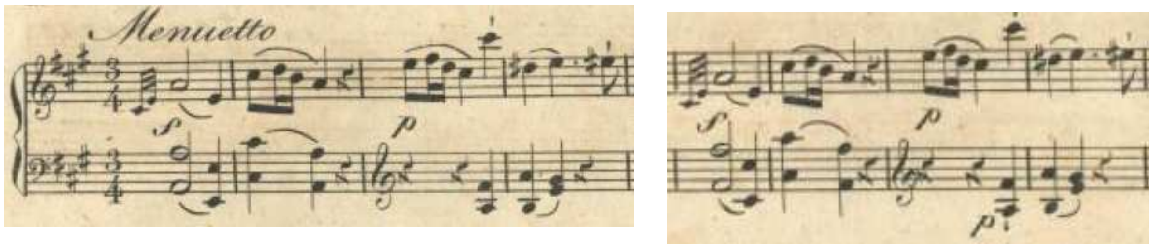


図16 B&H モーツァルト全集改訂版 第2楽章 第1~4小節及び第31~34小節

鳥代：ということはモーツァルトの自筆譜通り第3小節、第33小節の両方とも「2点イ」音で校訂された楽譜は従来存在しなかったのね。

教授：その通りだ。だが自筆譜が正しいとばかり言えないという意見もある。国際会議の発表に続く質疑応答で、フロアのロバート・レヴィン氏から、「モーツァルトの自筆譜には、五線の上の加線の本数が不足していることが多く（また、五線譜の下では加線の本数が過剰なことが多く）、この場合も作曲家自身の誤記の可能性もある」との意見が出たとのことだ。

犬輔：間違いと断定できるのは、矛盾が指摘できたり、理論的に説明できる場合に限ってであるので、今回は間違いの可能性だけにとどめざるを得ないと思います。

教授：そうか。ではモーツァルトの意図は次の通りでいいね。

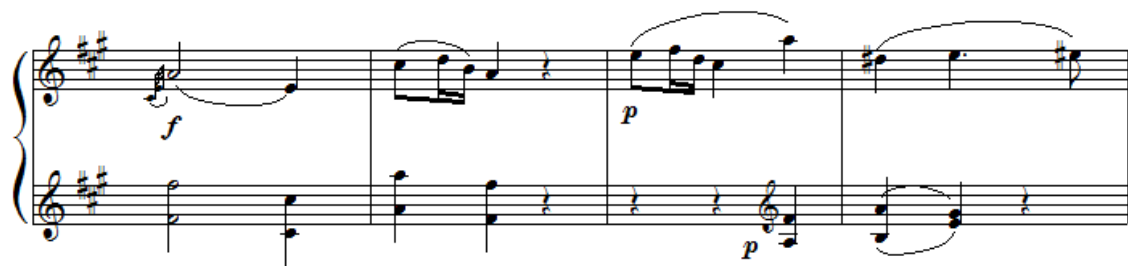


図17 モーツァルトの意図（想定）第2楽章 第1~4小節及び第31~34小節

4.4 第2楽章 第24~26小節

教授：この部分は従来から多くの議論がなされてきた。和声の問題なので理論的に慎重に扱う必要がある。

犬輔：自筆譜を見てみましょう。



図18 自筆譜 第2楽章 第19~30小節

鳥代：手書きのままでは分かりにくいので清書しておきましょう。和音も書いておきます。

和声的ロ短調 I III I I

IV イ長調 I I III II

旋律的イ短調 I I₇ DD 和声的イ短調 DD V

図19 自筆譜（清書） 第2楽章 第19～30小節

犬輔：DDの和音って何でしたっけ。

鳥代：ドッペルドミナントのことよ。ドミナントのドミナントだからIIの第三音（イ短調では二音）を半音あげたものに相当するの。

犬輔：初版では強弱記号が追加されているね。初版改訂版を載せましょう。

p *p* *cresc.* *cresc.*

f *p* *cresc.* *cresc.*

改訂前はナチュラルが欠落

改訂前は付点が欠落

図20 アルタリア改訂版 第2楽章 第19～30小節

教授：この部分に関してアルタリアは自筆譜に忠実に音符を記述しており、強弱記号もモーツァルトの指示に従っているものと思われる。しかし、後の校訂者はそうは思わなかったようだ。新全集の序文にはこう書かれている。「メヌエットの24～26小節の伝承は明らかに原型を損なっている。疑いなくその部分はイ短調であると理解されるにもかかわらず、初版では（奇妙なことにモーツァルト全集 OEUUVRES COMPLETTESですら）関連する臨時記号が欠落している；26小節（右手の最初の4分音符）には両版とも2点ハ音を印刷しており、続く和声進行（27小節以降）と矛盾している。それゆえ編集者はこの楽句に解釈を加えることを決断した」。

鳥代：その解釈が新全集では代案として角括弧で示されているんです。角括弧の部分を展開してみましょう（矢印をつけました）。

図21 新全集版代案 第2楽章 第19～30小節

犬輔：この新全集代案の解釈はイ短調ありきで、モーツァルトがそこはイ長調であるとわざわざ強調して記入した第26小節のトートロジー的シャープ記号を恣意的に外してまでの断行だったんですね。

教授：そうだ。ミクシ氏はこう言っている。「自筆譜を見てみると、このシャープ記号が狭い隙間に後から書き入れたような筆跡で記されていることがわかる。おそらくモーツァルトは、イ短調に転調した第27小節を書いたのちに、ここまでの部分がイ長調であったということを確認を示すために、第26小節のシャープ記号を遡及的に書き加えたのではないかと。初版において無意味に思えた記号が、自筆譜ではきわめて有意義なものとして理解されるのである」。(因みに自筆譜のシャープ記号の上方には色の濃いインクで二つの点が記入されている。別人のペンである可能性が高く、自筆譜もアルタリアに渡されていたことを強く示唆する)。

鳥代：やはりモーツァルトのオリジナルの通りイ長調部分を p で弾いてからクレシェンドし f になるところでイ短調になるのが自然体ね。新全集の代案解釈には無理があったわ。

教授：そうだ。しかもこの解釈が実用譜に採用され広く流布してしまったようだ。ピアノの先生のサイトを見るとほとんどの人がイ短調で弾かされてきたとコメントしているからね。

犬輔：その代表がヘンレの旧版²¹ですね。

鳥代：ほかの楽譜ではどうなっているのかしら。つぶさに見てみたいですね。

教授：今回調査したすべての出版譜を以下に並べ、アルタリア改訂版から変更された部分に丸印を付けてみよう。ただし、スタカートの違いは煩雑になるので印を付けていない。一つ一つにはコメントしないが、いい教材になるから諸君たち自身でもよく見て研究するように。

Figure 22 shows two systems of musical notation. The first system consists of two staves (treble and bass clef) with dynamics *p*, *p*, *cresc.*, and *cresc.* The second system also consists of two staves with dynamics *f*, *p*, and *cresc.* There are circled annotations in the second system: a circle around the first measure of the bass line and a circle around the first measure of the treble line in the third measure.

図 22 B&H モーツァルト全集版 第2楽章 第19~30小節

Figure 23 shows two systems of musical notation. The first system consists of two staves with dynamics *f*, *p*, and *cresc.* The second system also consists of two staves with dynamics *f*, *f*, and *cresc.* There are circled annotations in the second system: a circle around the first measure of the treble line and a circle around the first measure of the bass line in the third measure.

図 23 モーツァルト全集改訂版 第2楽章 第19~30小節

Figure 24 shows three systems of musical notation for the second movement, measures 19-30. The first system features a treble clef with notes and a bass clef with a whole rest, followed by a piano accompaniment. Dynamics include *f* (circled), *p*, and *cresc.*. The second system continues the piano accompaniment with dynamics *f* and *p*. The third system shows a treble clef with notes and a bass clef with notes, including a circled *sf* dynamic.

図24 旧全集版 第2楽章 第19~30小節

Figure 25 shows three systems of musical notation for the second movement, measures 19-30. The first system features a treble clef with notes and a bass clef with a whole rest, followed by a piano accompaniment. Dynamics include *f* (circled), *p*, and *cresc.*. The second system continues the piano accompaniment with dynamics *f* and *p*. The third system shows a treble clef with notes and a bass clef with notes, including circled dynamics *sf* and *p*.

図25 シャーマー版 第2楽章 第19~30小節

Figure 26 shows three systems of musical notation for a piano piece. The first system consists of four measures. The first measure has a dynamic marking of *f* circled in the treble clef. The second measure has a dynamic marking of *p*. The third measure has a dynamic marking of *cresc.*. The second system also consists of four measures. The first measure has a dynamic marking of *f*. The second measure has a dynamic marking of *p*. The third measure has a dynamic marking of *cresc.*. The fourth measure has a circled note in the treble clef. The third system consists of four measures. The second measure has a dynamic marking of *f*. A circled note is present in the bass clef of the second measure.

図26 ペーターズ版本案 第2楽章 第19~30小節

Figure 27 shows three systems of musical notation for a piano piece, identical in structure to Figure 26. The first system has dynamics *f* (circled), *p*, and *cresc.*. The second system has dynamics *f*, *p*, *cresc.*, and a circled note in the fourth measure. The third system has dynamics *f* and a circled note in the second measure of the bass clef.

図27 ペーターズ版代案 第2楽章 第19~30小節

Figure 28 shows three systems of musical notation for a piano piece. The first system consists of two staves (treble and bass clef) with a key signature of three sharps (F#, C#, G#) and a 3/4 time signature. The first measure of the treble staff is marked with a circled *f*. The second measure is marked with *p*. The third measure is marked with *cresc.*. The second system also has two staves, with the first measure marked *f* and the second *p*. The third measure is marked *cresc.*. The third system has two staves, with the second measure marked *f*. The notation includes various note values, rests, and slurs.

図28 新全集版本案(1986年)第2楽章 第19~30小節

Figure 29 shows three systems of musical notation, identical in structure to Figure 28. The first system has a circled *f* in the first measure of the treble staff and a circled *p* in the second measure of the treble staff. The second system has a circled *f* in the first measure of the treble staff and a circled *p* in the second measure of the treble staff. The third system has a circled *f* in the second measure of the treble staff. The notation includes various note values, rests, and slurs.

図29 ヘンレ旧版 第2楽章 第19~30小節

鳥代:いろいろな解釈がありましたが、モーツァルトは結局どのようにしたかったのでしょうか。
教授:それではモーツァルトの意図を想定してみよう。新全集の本案と同じが妥当なところだね。

図30 モーツァルトの意図(想定) 第2楽章 第19~30小節

5. おわりに

鳥代:ほかに細かいけれどもたくさんの相違が見られるわ。

教授:ミクシ氏は「自筆譜はこれまで知られていなかった重要な情報を豊富に与えてくれるが、このソナタの演奏にかかわるすべての問題を解決してくれるわけでもない。研究者と演奏家がともにコンセンサスを求め、論議していく必要があるだろう」と最後に述べている。

犬輔:今後の研究成果が期待されますね。

- 注1: クローネン新聞 (2014.9.27) Christoph Matz: Verschollene Mozart- Sonate in Bibliothek entdeckt
 注2: 自筆譜ファクシミリ National Széchényi Library < http://mozart.oszk.hu/index_en.html#imprint >
 注3: ヘンレ新版 Wolf-Dieter Seiffert (Editor), Markus Bellheim (Fingering): Wolfgang Amadeus Mozart: Piano Sonata A major K. 331 (300i) (with Alla Turca), G. Henle Verlag, 2015, Order No. HN 1300
 注4: 新全集校訂報告 NMA IX/25/1-2: Klaviersonaten – Bd.1 & 2, Kritischer Bericht (Plath/Rehm, 1998), 87 頁注 35
 注5: 同上新全集校訂報告 88 頁注 37
 注6: INTERNATIONALER MOZART-KONGRESS STIFTUNG MOZARTEUM SALZBURG AKADEMIE FÜR MOZART-FORSCHUNG 2. – 5. OKTOBER 2014 < http://www.mozarteum.at/assets/files/Mozart_Kongress_Folder2014_2.pdf >
 注7: New England Journal of Medicine (Vol.315, No 12)
 注8: ミクシ氏のインタビュー記事 Krisztina Fenyo and Krisztina Than (Reporters), Hugh Lawson, Larry King (Editors), REUTERS (2014.10.1): Hungarian scholar stumbles on original score of Mozart sonata
 注9: 畑野小百合: 発見者による国際モーツァルト会議での報告 (要約) (WEB)
 注10: Mozart K331 Piano Sonata A major, Kocsis Zoltán fortepiano < <https://www.youtube.com/watch?v=IXPm1Erks-w> >
 注11: 新全集版 NMA IX/25/1-2: Klaviersonaten – Bd.1 & 2 (Plath/Rehm, 1986)
 注12: アルタリア初版 (ca.1784) TROIS SONATES pour le Clavecin ou Pianoforte composées par W. A. MOZART. Oeuvre. VI. - Vienne: Artaria. Bibliothèque nationale de France, Gallica < <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9081585n> >
 注13: アルタリア初版 (ca.1784) Harvard University Library < <http://pds.lib.harvard.edu/pds/view/14495231> >
 注14: アルタリア改訂版 Mozartsammlung der Staats- und Stadtbibliothek Augsburg, 4 TONK 1581 < <http://www.fischer-download.de/Search.aspx?BereichIDMitErgebnissen=e1b13936-c8bd-4b19-bcd1-70372dfdd3f5> >
 注15: 前掲ヘンレ新版 Comments p.1
 注16: 旧全集版 Series XX editors, Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1878. Plate W.A.M. 331
 注17: B&H モーツァルト全集版 Oeuvres complètes / de Wolfgang Amadeus Mozart VII sonates pour le pianoforte. - Leipsic : Breitkopf & Härtel, 1798
 注18: B&H モーツァルト全集同上改訂版 1818
 注19: G. シャーマー版 Sigmund Lebert, William Scharfenberg, New York: G. Schirmer, 1893. Plate 1114200
 注20: C. F. ペーターズ版 Carl Adolf Martienssen, Wilhelm Weismann, Leipzig: C.F. Peters, n.d.(ca.1938)
 注21: ヘンレ旧版 Ernst Hertrich (Editor); Mozart: Piano Sonata A major K. 331 (300i) (with Alla Turca), G. Henle Verlag, 2009, Order No. HN 50

(作成: 2015年9月30日、改訂: 2015年10月5日)